

佐藤 遥加  
SATO Haruka



冬に夏を思い出す  
油彩、キャンバス



## 冬に夏を思い出す

四角い形を保ったままで自由になれる方法を探しました。

○<田>「ある夏の一日」

○<□□□□>「夏のあいだ」

何か「思い出す」ことをしたとき、

- ・過去に経験した事実は変わらない。—4枚の絵
- ・その日の状況や気分、話し相手など些細なきっかけによって変動する。—配置方法

普段から、日記を書くようなつもりで制作をしていますが、そのエピソードを思い出す場所や時間帯、天候によって少しずつ変化します。記憶が移り変わるならば、絵の状態もひとつでは収まらないんじゃないかなあと考えたのが発端です。

たとえば冬に夏を思い出すと、ほんの一瞬だったと感じることもあれば、ひと場面がとても長い時間であったと勘違いしてしまうこともあるのではないのでしょうか。何かをきっかけに、いままで体験してきた出来事が一緒くたに思い起こされたり、時系列が曖昧になることもあります。わたしは暑さに参って倒れた日があったとしても、ささくれができやすくなって布団から出られなくなると途端、都合よく盛夏が恋しくなってしまう。

飾る環境で作品の見え方が変わることに、隣や周辺に並ぶ作品同士が影響しあうことがずっと気になっていました。しかし同時に恐ろしく感じることもたしかで、仮に画集であればフォーマットや色みの補正、あるいは毎日ネットで更新される報道のように、コメントや編集次第で印象は簡単に操作できてしまいます。ただでさえ記憶という覚束ないモチーフを扱っているのに、絵という実態のあり方すらわからないなんて、自分はなんて不確かなものを行っているのか、と頭を抱えながら制作することも少なくありません。

そこで、壁に飾るという約束はそのまま、おのおの姿を変えず、配置によって風景を一変させることを思いつきました。また、これまでは場所や人物、かつて目にした特定の出来事を具体的に描く場合がほとんどでしたが、今回は夏という漠然とした対象を主題にしました。この制作に手をつけ始めた時期は金木犀の咲き始め、描き上げて最初に展示する頃は手が悴んでいると思います。

壁に掛けるだけの行為で、窓から景色を眺めるように、見る人も、描き手である私すらも、いつへもどこへでも連れて行ってくれるような絵を目指していきたいです。